偽狩人

火鉢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偽狩人

【Ｎコード】
Ｎ６３７５Ｍ

【作者名】
火鉢

【あらすじ】
通り魔にあい、目を覚ましたらアーチャーの体にこれから聖杯戦争が始まってしまうのかと思いきや？話の性質上、原作の重大なネタバレが普通に含まれておりますのでお気をつけくださいませ。

一話

薄暗い冬の路地、その周囲にはキンと冷えた空気がひろがっていた。

そして

「きゃあああああああああああ」

‘前歩く

女性駆け出す

夜道かな

俺はなんにも

わるくないのに・・・’

防寒対策で厚着をしていた俺を暴漢と勘違いした女の人が悲鳴をあげて逃げていった。

そんな濡れ衣を受け一句詠んだ俺の心情といたしましては…『またかよ』だった。

俺は目つきが悪いせいでよく誤解されるのだ。

さらに口下手も加わっての二重苦でろくに友達もできない。

数少ない話しかけてくれた小学生時代からの友人もその理由が

『なんか、ガンつけられてると思ってムカついたから』

なんていう切っ掛けだし。

他にも

クラス委員長に提出物渡そうとしたら何故か謝られたりとか
普通に黒板見てただけなのに先生に注意されたりとか
会話ができる友人にすらよく「今、怒ってる？」とか言われるし
だから慣れに慣れきって平気、な訳ねーよ！
度重なる勘違いで俺の心はボドボドだー！！！
チラリと道の脇を見ると『変質者注意』の看板
「俺、変質者じゃないのに…」
でもまあ、女の人はこんな日が暮れた時間帯の道は心細いよな
……その上俺みたいな人相悪いのが後ろからヒタヒタと、
どうしてわざわざこんな思いしてまで出掛けたんだろうと自己嫌悪に陥った所で手に感じる重み
今日はＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの最新刊が発売したから本屋に行ったんだ。
やっと手に入れた新刊、俺はコミックス派なので待ち遠しさもひとしおだった。
あー、はやく家に帰って読みたい！こころなしか本からも読んで読んでとオーラがでてる気さえしてくる
でも、これ読み終わったらまた次のコミックスが出るまでお預けなんだよな～。
「次の巻が出るのはいつになることやら」
本当に完結するのかな。終わる前に俺死んでたりして

なんて思っていたら

どすんっ

衝撃の後にやってきたのは鋭い痛みだった

なんで、まさか通り魔？おれ、ささされ…た？

「お前等みたいな、お前等みたいな不良がいるからっエリートの僕が楽しく暮らせないんだっ！！」

こだまするヒステリックな喚き声、マジで俺が何したってんだ。

こんな時にまで顔のせいで誤解かよ。

「ぎ…ごぶっ」

反射的に出た叫びは喉をせり上がるどろっとした血液でかき消され、冷たい道路に倒れこむ

身じろぎ一つしようとするたび背中に激痛が襲い、傷口から熱が流れだして冷えてゆく。

足音が遠のいていったのを聞くに犯人はもうこの場からいなくなったようだ。

痛いイタイ寒いサムイ

目線を動かすと生ぬるい真っ赤な血だまりの中に本の袋が落ちてい

た。

はんたー…、結局読めなかった。

見たかったな、つづ、き

……ん

「知らない天井だ」

まあ、言ってみただけだしその上天井穴開いてるけど

・

・

・

ええええっ！？俺通り魔にさ、刺されたんじゃなかったっけここ何処！？

体勢もうつ伏せだったのが仰向けに倒れてるし、ぐっと力を入れて起き上がる

瓦礫の上で寝ていたようでパラパラと残骸がまわりに零れ落ちる

辺りを見回すと衝撃波で家具がめちゃくちゃになったような薄暗い部屋の中だった。

立ち上っても痛みはないようだけど、なんとなく体が動かしづらいような？

貧血のせいかなと背中に手を当てると

傷がなかった

でも何故だか服は真っ赤だった。

ちょっと待てや！俺が着ていたのはこんなひらひらした赤い服じゃないぞ！？

しかも目線の高さとかも色々とおかしい。鏡、鏡はないのか！

俺が意識を取り戻した室内は荒れていたが女性の部屋だったようで丁度大きな姿見があった。

そこで見たのは

「…ア、ア、アーチャー！！？」

そう、俺の姿はまるきりＦａｔｅのアーチャーの様になっていた

短くオールバックにされた白髪、、鷹の様な目に収まる鋼色の瞳

それに対するような浅黒い褐色の肌、ものおもわしげに歪められた眉間の皺

自然とシニカルに吊り上る口元、普通なら派手に浮いて見えるだろ

う赤い外套を着こなすたくましい体

「かっけぇ〜〜〜」

ってうわ。今気付いたけど、カッコイイなオイ！！なんか低音がよく響いてて、

具体的に言うなら……

「俺様の美声に酔いな！！」ってカンジだ。

うわ〜…アーチャー凄いなあ。というより、士郎こんなイケメン確定とかなんてスペックだよ。

くそっ、ギャルゲの主人公は化け物かっ！？

…等と、心の中で騒いだり、夢なんじゃないかと淡い期待を抱いて控え目に頬をつねってみたり

往生際の悪いことをしていた俺だったが、冷静になってこの状況を考えてみることにした。

瓦礫の散らかった女性の部屋、そしてアーチャーになった俺。

もしかして今はアーチャーが召喚された場面？

そうだとしたら、俺はアーチャーに憑依してしまったのだろうか。

なら、ここで待っていればあの有名な赤いあくまに会えると？

どどどどど、どうしよう、ポーズどんなだったっけ。

元いた瓦礫の上に足を組みよりかかって座って待つ。

しかし、勢いよく扉を開けて入ってきたのは……

……団長？

一話（後書き）

最初から短めですみません。
次話からはもう少し長めを予定しています

二話

ｓｉｄｅ―クロロ

今回のターゲットはいわくつきの本だった。
念能力者であり、一部のマニアの間で熱狂的なファンがついている
という作者
その作者が死ぬ間際、最後に書き記したという『紅い騎士の物語』
作者自身が編集、製本までの全てを手がけ、作り上げた一点物だ。
それだけでも価値のあるものだがこの本の価値を高める理由は別の
ところにあった。

“開けない”のだ。

こんなにおかしいことがあるだろうか。
本は文字を記し、伝えるものだ。しかし、この本はその役目を放棄
している。
中にはどんなことが記されているのか。もしや、何も書かれていな
いのか？

好事家達があらゆる手段をもちいて本を開こうとしたがまったく成
果は得られなかった。

結局、最終的に本は小さな国の国立図書館に寄贈され、飾られるに
収まっている。

今更そんなものを何故と問われれば、これもまた気まぐれのような
ものだろう。

『団長、コッチは始末できたよ？』
携帯から平坦な声が聞こえる。逃走ルートを確保しているシズクからの連絡だ。

「ああ、わかった。目的のものも手に入れた。今から行く」
ただの図書館だけあって、警備も手薄であっというまに片付いた。
シズクの能力で死体も掃除した。
これで明日騒ぎになったとしても警備員が本を持って消えたとでも思われるのだろう。
去り際に他の本も何冊か拝借したし、もう此処には用はない。
外の合流地点に戻ると今回組んでいたシズクとフェイタンが待っていた。

「団長は本当に本好きだよね～」

「わざわざ盗るようなモノでないネ」

ふんとつまらなさ気に吐き捨てるフェイタンに近くの木の上からがさりと抗議者が降りてきた。

「ええ～？あの有名作家のいわくつきの本だよ！超レア物じゃん！！」
そういえばシャルナークは作者のファンだからと今日は自主的に参加して来たのだったな。

戦利品の赤い革張りの本に目を向ける、どうして盗った……か。

「読み手を選ぶ本…面白いじゃないか？」

アジトの一つについたオレは居間でシズクから受け取った缶の紅茶を飲みながら一息ついていた。
いつもなら一仕事終えた後はビールで乾杯なんだが、それは別の物を盗りいった奴等が帰るまでのお預けだ。

目の前ではシャルナークが本を相手に奮闘している。

「――――ッ！！マジでなんなのさ、この本！力を入れても念を通そうとしてもビクともしないじゃないか！！」

見ていてわりと面白い。

「あ！！団長も笑ってないでちょっとは協力してよ！？」
件の本がこちらに投げられる。
大ファンとして自分が絶対に開けてみせるんだ！と息巻いていたのはお前だろうに。

見かけは装丁・装飾ともになんてことはない本だ。

この本の脇についた不必要にデカイ錠前をのぞけばの話だが。

シャルナークが早くしろと促してくるのでそれではと多少、腰を据えてかかるつもりだったのだが
錠前に手をかけた瞬間、ピンという軽い音の後にゴツイ錠前はあっ

けなくはずれた。

「ちょっ、どういうことさ！なんで団長が触っただけで鍵が外れるんだよ！？」

「まあまあ、落ち着こーよ？」

「そのとおりネ。ただ本がシャルは自分に相応しくないと思たダケヨ」

黙して暗器の手入れをしていたフェイタンが絶妙なタイミングでシャルの神経を逆なでする

「むきーーーー！！！」

「フェイ、火に油を注ぐな」

しかし、これはオレ自身も驚いた。

奇妙な事はこの後も起こった。鍵の取れた本をシャルに渡したが今度はページが開けないのだ。

オレが手に取るとこれもまた何事もなく開いた。……シャルがこの事実に舌打ちを一つする。

そしてオレ達は少しの間話し合った。

もっともシャルはむくれており、他の二人は考察に加わるタイプではないので結局オレの考えをまとめただけだ

ここから先は想像に依るが、

作者は特質系の念能力者で同じ特質系の念能力者でないと開けられないのではないかということだ。

そこで、実験のために別の獲物を盗りに行ったパクノダ達を呼び戻し、本を開かせてみようとしたがこれもできなかった。

どうやら、最初に錠をはずした特質系の念能力者。
それが本を開くことのできる唯一の存在らしい。
ここまで制限をつけられるとはよほど作者が強力な念能力者だったのか？
はたまた死ぬことによってさらに念の制限が強固になったのか？
それは現在では知ることはできない。

今オレはシャルと共に本を読んでいる。ページを開けるのがオレだけだからだ。

「団長！つぎ、つぎのページ早くめくって！！」

「はいはい……」
中身はというと、なんともいいがたい英雄譚のような内容だった。
唯一つの理想を掲げた紅い騎士が色のない戦場を駆け続ける。
数多の命を救おうとも騎士の胸に宿るのは手から零れ落ちた命への後悔の念のみ
その思いを持ち、さらに駆ける騎士が行き着いたのは
救った者からの裏切りによる処刑
随分と滑稽な話だった。

「うあ〜！泣ける〜〜〜！！」
横にいたシャルを見やると顔中が涙やらでぐしゃぐしゃになっていた。
それ程のものだっただろうか。確かにそれを前提として狙って書かれた本なのだろうが…。

「やっぱ、この作者の本はキャラがいいんだよね。それに、団長もそんな事言ってるけど
最後のほうなんか俺が読み終わる前にページめくっちゃったりして結構のめりこんでたじゃん」

そう、だったか？
まあこんな坂道を転がるように破滅へと向かう様は傍目で見ていれば面白いかもしれない。

シャルも満足したようで、「早速、スレ立ててくる！」と今は携帯に集中している。

だがオレは自分でも珍しく読み終えた本が気にかかりパラパラと本をめくっていた。
ふと、最後のページに目が留まる。そこには登場人物の紅い騎士であるらしい簡素な挿絵と
幾何学的な紋様が描かれていた。
そのままオレは吸い寄せられるように、その紋様に手を重ねた。

次の瞬間――――

ズシンと上の階から大きな震動と共に爆発音が響いた。

「二階か！？」

今アジトにいるのは、シズク・フェイタン・シャルナーク、
そして途中で呼び戻したパクノダと一緒だったノブナガ・ウボォーギン・フィンクス。
全員この一階の居間にいる。追っ手か？

アジトが知れるのは不都合だ。早めに消しておかなければ
二階にあがると床には薄く土煙が舞っていたが衝撃ほどの被害ではないようだ。

気配からすると相手は一人、女性団員用の部屋から侵入してきたようだ。
クモのアジトに単身乗り込んでくる奴など、どんな命知らずかと少し楽しみにしつつドアを開けた。

それと同時にオレの左手から鈍い痛みのようなものが走り、部屋の中の人物に見入る。

そこら中に散乱した瓦礫の中で月明かりをあびながら、
今しがた見知ったばかりな、本の登場人物であるはずの紅い騎士が
……

ソコに――――居た。

二話（後書き）

おまけ

有名作家のいわくつき本手に入れたけどなんか質問ある？

1　：しゃるるん
フヒヒwサーセンww、なんとあの有名作家●●●のいわくつきの本を手に入れたよ！！

中身もばっちり読んじゃった（／∀／＊）キャハ

2　：名無し王に俺はなる！！
＜＜1釣り乙

3　：名無し王に俺はなる！！
＜＜1妄想癖の1がいるのはここですか？

4　：名無し王に俺はなる！！

俺はバイト仲間と天空闘技場へ行くことにした
しかし、会場は物凄い人で、とても入ることが出来ず、
俺達は目的を街見物に半ば無理やり変更し飲み屋を巡っていた。

3件ほどまわると辺りはすっかり暗くなっていた。
すると友人のYが「あれ？あんな所に人がいるよ」と言った
見てみると確かに人が一人ポツンと立っていた。
顔を見てはっとする、まるで能面のような顔で気味が悪かったのだ
すると酔っ払ったせいかYが「お一人ですか？良かったら飲みに行

きませんか」などと言い出した
やめろと制止する俺をきにせず気味の悪い男に絡むＹ
すると能面のような顔の男はこちらへ向き直りあっちへ行けとでも言うように袖を振った
Ｙもその反応に諦めたのか静かになったと思ったが、どうも様子がおかしい

「！？お、おい」

そうこうしている内にＹがいきなり泡を吹いて倒れてしまった
訳がわからず能面男の顔を見るとにたりと哂い呟くように喋りだした
「まったく、待っていたのはお前等じゃないのに。邪魔なんだよ」

またしても男の袖が揺れるそれを合図に今度は俺に異変が起こった
まるで体を見えない腕でつかまれているかのような苦しさが襲う。

こいつはやばい、このままじゃ俺も・・・
そう思った瞬間、暗い道の向こうから一人のピザ宅配バイクが！！
寺生まれで霊感の強いＴさんだった！
Ｔさんはバイクを華麗に操りそのまま急停止して俺の横へ
「破ぁ！！」
男に向かってＴさんが叫んだ
するとＴさんの起こした衝撃波が男を吹き飛ばし俺も見えない腕から逃れることが出来た

「ありがとうございますＴさん、でも何でここへ？」
そう聞いた俺にＴさんは
「なぁに、この辺りは最近奇妙な事件が起こってるっていわく付きの場所でな、

こんな事もあろうかとな・・・」
そういいながらYの胸に手をあて呪文を唱えるTさん、
するとYが息を吹き返し意識を取り戻した。

「きっと死者が死者を呼ぶ闘技場なんだろうぜ、ここは・・・」
夜空を見つめて呟くTさん
寺生まれはスゴイ、俺は熱々のピザを食べながらそう思った。

5　：ミルキー
つか、そのコテお前この前も釣りしてた奴じゃん。
みえみえなんだよニート。氏ね

「……今日は釣りじゃないのに」

三話

ク、クロス物ですか？だってこんな服が似合う人なんて１５６ｃｍなヴィジュアル系の人かハンターの団長さんくらいしかいない……よな？
しかも背高いし、嫌、でもまだ本当に団長さんだと決まった訳では

「おい団長、どうしたんだ？後ろがつかえてるぜぇ」
団長確定キターーー！！しかも、ノブナガまでいるじゃないか、意外と渋い…だと？

「お前は何者だ？」
圧倒されていたら団長さんに話しかけられた。それはできれば俺も聞きたいですよ。
なんて言っても殺されるんだろうな。やばい、どう転んでもバッドエンドにしか繋がらない気がする。
そしてテンパりすぎた頭で俺が口走ったのは……；

「おやおや、開口一番それかね？こりゃまた…。随分なマスターに喚ばれたものだ」
……死んだ。これから来ると予想してた赤いあくま用の台詞を言ってしまうなんて。

「マスター？呼んだだと？それはどういうことだ」

くいついてきた！？予想外の事態だ。俺なんて何時でも殺せるという余裕の現れだろうか？とにかく会話を続けている限りは時間が稼げるようだ。
これはもうイケルとこまでいくしか！？

「どういうことだとは心外だな。私を此処に召喚したのは君のはずだが？」
いつ首を跳ね飛ばされるか判らないプレッシャーの中素の俺で話す度胸は皆無だ。
口調も自然とアーチャーを模したものになってしまう。

「……お前はこの本から喚びだされたということか？」
はぁ？本？

「本…とは？」

・
・
・

クロロ団長の説明によると、特質系能力者が書いたいわくつきの本を盗み、開いたところ最後のページに描かれていた紋様に手をかざしたと同時に衝撃と共に俺が現れたと…。

まあ、大体こんな所らしい。
正直、連続でこんな目にあわなきゃとてもしんじられない展開だよ。
普通ならここで手詰まりで何も判らないままだろうけど、

俺の目の前にはあからさまな糸口が提示されていた。
この団長さんが持ってる本。作者の名前が……

俺の名前と一緒なんだもん

いつのまにか取り囲まれてるな～。フィンクスとフェイタンすごい睨んで顔怖いなあ。
ノブナガ人事だと思って珍しそうにニヤニヤしてんじゃねーよ！
んで、シャルナークは何でそんなキラキラした目で見てくるかな～？へぇ、ファンなの、そう…。

よし、現実逃避もコレくらいにして早いとこ現在の状況を整理しないとねー。
ああ、もう辛いなぁ。ナニこれ？

まず第一に、目を逸らしたい所だったが、俺はもう向こうでは死んだのだろう。
情けない事に今わの際に願ったこの漫画の続きが見たかった。という想いと
平行世界の俺が書いたであろう本の念が引かれあい俺の魂を喚んだ。
その際、媒介になった本の内容がＦａｔｅのアーチャー・エミヤの物語に酷似していたせいで俺の中のイメージと重なり、このような

姿になってしまったのではないか、
なんて推論を組み立てていると

「パク、調べろ」

「ええ」

ざっと血の気が引く思いがした。

そうだ、旅団にはパクノダが居た！！人の記憶を読む特質系の念能力者だ。
ど、どうにか止めてもらわなくては、でもどうやって？

「やめておいた方がいいと思うが？」

「黙って、すぐに済むことよ」
ですよねー。ああもう、土下座して謝っても逃がしてくれる相手じゃないよな。
アジトも壊しちゃったし、でも俺だって巻き込まれた被害者なんだぞ！？

カツカツとハイヒールを鳴らしながら近づいてくるパクノダ
くそっ！俺はもうこの残された時間を彼女の巨乳を見つめて過ごすしかないのか…。
アレ？俺、今記憶読まれた後の死亡率上げた？

肩に手がおかれる

「さあ、見せてちょうだい。貴方の過去を…！？…いやっ！」
いきなりパクノダの顔が真っ青になり、ペタンとその場に座り込んでしまった。

と、同時に空気が震え、気が付いたら俺の首に刀があてがわれていた。

ノブナガ何時の間に！？見えなかった！ぜんっぜん見えなかったぞ！？
こわ、こわーーー！！！

「てめえ、パクに何しやがった？」

そんなの俺が聞きたいっつーの！！

「やめてっ！！」
この絶望的にまずい状況を取り去ってくれたのは意外にもパクノダ本人だった。

「その人が悪いのではないわ…」
うん、俺何も悪いことしてないよ！？

「どういうことだ、パク？何を見た」

「…壊滅した街、炎、死にいく人間の呼ぶ声、地獄のような光景。

そして戦場、信じられないかもしれないけどコレだけは言えるわ。
彼は人間じゃない…」
壊滅した街に戦場？なんだそれ、いや待てよ？確かパクノダの能力って…

この間、刀は首に添えられたままだったのでずっと微動だにもできなかった。
それを団長が手で制し、下がらせる。お、恐ろしい…旅団怖い

「もう一度聞く、お前は何だ？」

「…私は、サーヴァントだ」

「サー、ヴァント？それはなんだ」
え？えー…と、どう説明したらいいんだろう。適当でいいか。

「サーヴァントとは、通常聖杯戦争にて召喚者に喚びだされ、マスターと契約する存在だ」英雄の霊とか言ってもこの世界じゃややこしいだけだろう。

「ほう、聖杯戦争とはなんだ？」
つっこみ厳しいなあ…。

「聖杯戦争とは手にした者のどんな望みをも叶える願望機を巡る戦争のことだ。
しかしそれは国ごとにやるようなものではない先程言ったマスターとそれぞれクラスを配したサーヴァントが7人ずつ7組で争う」
ここでクロロの目が鋭くなるさすがは盗賊。

「が、」

「今回はかなりのイレギュラーな召喚のようだな。この世界に聖杯はない。サーヴァントも私だけだ」

「クラスとは？」

あれ？落胆とかなにか反応あるかと思ったけどながすのか。

「クラスは喚んだサーヴァントの力や特徴によってつけられる。種類は、セイバー・ランサー・アーチャー・ライダー・キャスター・アサシン・バーサーカー、ちなみに私はアーチャー、弓兵だ」

まあ、ゲームでの話だし、今はそんなのありませんけどね。

団長は少しの間、何事か考えているようだった。

魔術師だのなんだのがいる事を前提にした話なんだけど信じてくれているのだろうか？

確か、この世界では超能力者とかも念で説明つくらしいが。

「…召喚者とマスターを別にしたのはその人物がそれぞれ違う為か？」

おお、さすがは団長！

フィンクスなんて頭から煙プスプス出してそうなのに理解力あるなあ。

「確かに、その場合もあり得る。サーヴァントのマスターたりえる条件は、

召喚をした事実ではない

令呪の有無だ―」

「令呪とは？」

「マスターとサーヴァントは使役といっても絶対服従ではない。その為、マスターはサーヴァントに対して3回だけ強制的な命令権を持つ令呪が体に現れる。3回以内であれば力の上昇から自害まで何であろうとさせる事ができる」

まあ、別に俺には関係ないし、喋っても良いよな。令呪なんてここにないし。

「ほう、その令呪とは…コレの事か？」

あったー！！？

団長がこちらにかざした左手にはゲームで見たとおりの令呪が輝いていた。

「不思議な紋様だな。少しずつ知識のような物が流れ込んでくる。しかし、やっと表情をだしたな」

まずい、滅茶苦茶まずい！調子にのっていらないことまで喋ってしまった。

本当にそれが効くのかどうかはまだわからないが、パクノダの話と合わせてひっかかる所がある。それを使われたら俺はランサーのように自害までさせられかねない。

だが、クロロ達は望んで召喚をしたわけじゃない。

―まだ交渉の余地はある！！

「いや、すまない。急だったものでね、それで…」
「団長！！何なんだそりゃ！？スゲーな、オイ！！」
む、フィンクスめ、人の言葉をさえぎりやがってこの眉無しが！
怖いから心の声にとどめるんですけどね。
「コレか？部屋に入ったときに浮かび上がったようだな。
話を聞いている間に少しずつ知識のような物が伝わってきた」
「いーなぁ！！いーなぁ！！なんで団長ばっかりなのさー！？」
「え？なんで団長の手にそんなのがあるんだっけ？」
「シズクまた忘れたか」
え～忘れてなんてないよーなんて、なんでいきなりわいわい盛り上がってんだよ？
なんかすごい疎外感だよ。好きな人同士でグループ作ってーみたいな…。
あ、古傷が…。
「こほん、もういいかね？」
ピタリと静まる。なんだよ、あんた等そのキョトンとした顔は？
「なんだ？」
「今までの話から察するに私は望んで喚ばれた訳ではないようだ」
「そうだな」

「―ならば（言うぞー、言うぞー）
令呪の破棄を願いたい」
「破棄だと？」
クロロの眉間に皺がよる。うっ、怖い。
「その通りだ。お互いに必要のある契約だとは思えないのでね。
キミが令呪に願ってさえくれれば、私もここから消えよう」
実際、嘘なんですけどね。逃げる気満々ですから。
「そうか、わかった。令呪に命じればいいのだな」
……え？嘘？やったー！よかったー！！
「ああ、では令呪に命じてくれ」
「では命じる。お前は―オレに逆らうな」
「な！？―ッ！ぐぁぁあっ！！」
なんだコレは？自分の内側を削ぎ落とされるかのような激痛
それが止むと、体中を襲う強い倦怠感。
いまやつはなんといった？
「どういうことだ？」
「ほう、確かに発動しているようだ。図形が一つ減っている」

「どういうことだと聞いている！！」
何故だ。クロロには俺をとどめる理由なんてないはず。
「お前は…何か勘違いしてるんじゃないのか？」
「―ッ！？」
「オレ達は盗賊だ。そして、この本はオレが奪ったオレの獲物。
そこから出てきたお前は、最初からオレの所有物のはず、菓子につ
いてきたおもちゃは菓子を買った奴のものだろう？」
……。漫画で見て判ってたつもりだったけど、なんて奴等だ。
人のことをお菓子のおまけ扱いしやがって…うう。
悔しい、物凄く悔しいぞ
「お～い、皆どこにいんだよー？」
ん？部屋の外から大きな声と足音がしてきた。
足音はどんどん近づき、扉からぬっと大柄な野人のような男が顔を
出した。
「おっ、いたいた。お前等いきなり消えたから心配したぜ～」
「ウボォーてめえ、あの騒ぎの中まだ寝てやがったのかよ！？」
「おう？それよりそいつぁ誰だ？見ねえ顔だな」
マジかよ！？こんな部屋中瓦礫になるような音して寝てるとか！！
「クッ、…クックッ」

「んぁ？変な野郎だな。何笑ってんだ」
うお、ついつい笑ってしまった。
「いや、すまない。つい…な」
「別にいーケドな」
！？ふと気付くとまわりからすごい凝視されていた。
「笑った…」
「笑えたんだ」
「これだから強化系ってやつは…」
「む、失礼だな。サーヴァントとて、元は人間だ。笑いもする」
そう、ＵＢＷルートの笑顔なんてすごい泣けますって！！
そして強化系信者は自重しろよノブナガ。
ウボォーのボケのおかげでちょっと落ち着いたよ。さて―。
「もう一度だけ問う。契約を破棄する気はないのだな？」
「ないと言っているだろう。くどいぞ？」
ちらりと本に視線を送る。さよならだな、俺の名前…
「承知した。
私の真名はエミヤ、これより我が弓はあなたと共にあり、あなたの運命は私と共にある
ここに契約を遵守すると誓おう」

オタクとしてこれだけはやっておかないとな

倦怠感はいつのまにか軽くなっていた

三話（後書き）

おまけ

ハンター道場第一回

「はあい！始まりました！もしもあの時ああしていたらを見てみるハンター道場！
案内役はわたくし、初恋の人を健気に待ち続ける乙女、ミトさんと！」

「……きものの似合う男の娘カルト（棒読み）」

「で、お送りします！」

「ただのバッドエンドだけどね」

「みもふたもない…では、早速どうぞ！！」

クロロの手に輝く令呪、やばい、もう無理だ

「ま、待ってくれ！！」

「どうした？」
これ以上嘘をつき続ける事が不可能と感じた俺はクロロ達に全てをぶちまけた。

「ほう、わかった。お前はただの人間ということか」

「じゃ、じゃあ」

「つまらん。こんなクズのようなものもつけていたくないな」
そう言って令呪のついた手をひらひらとかざす

「やれ―」

クロロの声と同時にすとん、という音がした

クロロや旅団員達が俺を見下ろしている

視点が低い、いや、床がすぐ目の前にある

ああそうか…これはおれの

くびがおち……

「う～ん、あっさり死んじゃったわねえ。カルトくんどう思う？」

「情けない男なんて死ねばいいと思う」

「あ、あなたはあなたで情け容赦ないわね…でもそうね、男の子は
諦めちゃだめよね」

「ボクはどんなでもかわいいけど。価値のないものなんてさっさと
捨てられるに決まってるよ」

「…絡みづらいわ。では今回はこの辺りで終了とさせていただきます」

「みんなの意見でボク達を消し去ることもできるよ」

「そこは応援よろしくお願いしますっていうとこでしょーーー！！？」

このコーナーの人物は本編とは一切関係ありません

四話

ｓｉｄｅ－パクノダ

急にアジトに戻れって連絡が入ったときは何があったのかと焦ったけど、開口一番
『この本を開いてみろ』だもの。

まったく拍子抜けしたわよ。
その上、得意気に自分が本に選ばれたことを説明し出して、
こんな団長見るのは久しぶりね。
なんて、とても微笑ましかった。

けれど、その後突然私達のアジトに現れた赤い男。

Ａ級首であるクモの巣穴にのりこんできたというのに不敵に構えている。
それはフィンクス達が殺気を放っても変わらない。
団長が何者かと問えば、
やれやれといった様子で自分を呼んだのは私達であるという事を言いだした。
殆どの皆が何を血迷った事を言っているのかという顔をしていただろう。

しかし、団長は心当たりがあるようで、とある推測を口にし出した。

この男が今日盗んだ本から出てきたのではないか、と、
…団員どころか赤い男ですら、いぶかしげであったが、
団長も確信のないままにはしない。

私に合図を送り、彼の記憶を読み取るようにうながす。
彼は何故かこれからされることを察しているようだった。
『やめておいた方がいい』等と、
普通なら苦し紛れにしか聞こえないような台詞を言った。
黙るように言うとあっけなく大人しくなった。好きにしろって事かしら？
けれど私が見たものは想像を絶するものだった。彼の言葉は私への忠告だったのだ。
最初に見えたのは炎、次いで壊滅した街、うめきを上げる死者達の声、
その後もどこかすら判らない戦場の光景が続く。その中に赤い男を見つけた。
彼はどんな時であろうとも助けを乞う命があれば自らを切り捨て危険の中に身を投じていた。そして、救いきれなかった命を思い、さらに自分を傷つける。
救えた命を返りみることなく…。なんて高潔で孤独な魂なのだろう。
気が付いたら私は悲鳴をあげて座り込んでしまっていた。
私の身をあんじたノブナガが彼に刃を向けている。
「やめてっ！！」
彼が悪いわけじゃないの。彼は何も悪くないの。
こんな悲しい『人』をもう誰にも責めて欲しくなかった。

私は団長に最初に見えた光景と彼が本当に人ではないのだという事を伝えた。

そう、彼は人ではない。
だって私が最後に見た彼の記憶は彼が彼の救った人間によって

処刑された姿だったのだから。

団長がもう一度問い質すと、彼は自分をサーヴァントだと言った。

その後の説明でつづくのはまるでおとぎ話のような話。
ノブナガやフィンクスなどはよく理解できていないようだったが、
令呪というものの説明にいたっては、団長が令呪の持手ということ
がわかり場が騒然となった。

その時彼が始めて表情を変えて驚いていた事に対して
団長はいたずらが成功し、してやったりという表情で嬉しそうだっ
た。

その後彼は令呪の破棄を願ってきた。
先程よりも鋭い目付きで自分は消えるとそんな悲しいことを言う。

しかし、彼は言葉の選択をあやまった。
『お互いにとって必要ない』だなんて、
団長と長年付き合った私達から見れば団長が既に彼の存在に対して
興味を抱いているのはあきらかだった。これでは団長の一人相撲に
なってしまうではないか。

案の定団長が願ったのは彼の束縛だった。
少しの間うめく彼の姿に心苦しかったが、問題なのはその後だった。
彼から団長へと向けられるすさまじい怒気。
団長はというと、涼しい顔で彼へ更に挑発するような言葉をなげかける。
それが私には相手にかまってもらいたくて意地悪する子供に見えたが高まる緊迫感はもう破裂しそうな程だった。
誰もが戦闘になると思ったその時―
「おーい、皆どこにいんだよ？」
ウボォーはまさに救世主と呼ぶに相応しい働きをし、私達にとても貴重なものを見せてくれた。
自ら人ではないと言ったものの笑顔。なんて暖かい顔で笑うのだろうか。
あんな過去を生きながら、なんて晴れやかに―。
彼も団長を認めてくれたのだろう、最後の確認を告げる。
団長はウボォーが最初に彼の負の感情以外の表情を引き出した事に対してスネていたが続く彼の言葉で視線を戻した。
―契約の承諾―
神秘的だ。雰囲気にのまれるとはこういう状況なのだろうか。

向かい合うのは黒の主と赤の従者、天井からは月明かりのスポットライトが差し、
その光景はまるで絵画のよう堂々と響く宣誓は神話の時代の祝詞のようだった。

これからきっと彼、エミヤは団長の為に力を尽くしてくれるだろう。
そう、自らの身に代えても…。

その忠誠を今一身に受けたばかりの団長は早々に身を翻し、エミヤに部屋の掃除を命じた。どうみても照れ隠しだ。さっきの意趣返しも半分入っているのだろう。

他の団員も少し呆れた顔をしている。
エミヤを見ると虚をつかれた感じだったが、意外にも軽口で応戦していた。
彼も実は子供っぽいところがあるのかもしれない。
掃除を手伝うとシズクと申し出ると考え事があるのだと丁重に断られてしまった。

自分一人でやるのはマスターへの当てつけか、それとも最初の仕事だからなのかは判らない。けれど、私はこれからの事を考え、とてもどきどきしていた。

まるで夢の国への切符を手に入れた無垢な少女のように

1階に戻り、皆で話し合った結果
明日までに他の旅団員を召集し、紹介と共にエミヤの実力を見るということに決定した。

誰が戦うのかは当日決めるとのことだったが、
皆自分が戦いたくてうずうずしているようね。

・　・　・

次の日、私達が見たのは、
まるで新築同様になった部屋で優雅に紅茶を飲むエミヤの姿だった。

彼は本当に、人ではないのね。

四話（後書き）

パクノダサンハステキナジョセイデスヨー
ふざけましたすみません。でも彼女はかなり好きです
原作ではいうに及ばずドラマＣＤの彼女もかわいいですよ。
そして主人公にまた死亡フラグが立ちました。
ハンターはバッドルートの宝庫ですよね。

五話（前書き）

今回、魔術に対する自己解釈が含まれています。
ここは違うだろうという部分がありましたら
ご教示下さると嬉しいです。

五話

いやいやいや、もう腹をすえてこの世界で生きようって決めた矢先に

「この部屋を破壊したのはお前だ。片付けておけ」だってさ。

全くこんな所まで再現してくれなくても…。

俺もついつい

「了解した。地獄に落ちろ、マスター」

なんて命知らずにも脊髄反射で返してしまったよ。旅団の人達結構温厚？

女性陣、とくにパクノダは最後まで手伝おうかと言ってくれてたが

「一人で考えをまとめたい」って答えたら了承してくれた。

なんか嫌な思いさせたみたいなのに優しいなあ。

さて、もちろん考え事をしたいというのは嘘ではないが、実はもう考え事体はまとまっている。

後はそれを試すだけだ。

俺は半壊した部屋の隅に転がっているテレビをいまだ違和感を感じる体で運び目の前に置いた。

すう、と深呼吸を一つし手を添える。

―解析―

頭の中にテレビの回路や構造が詳細に広がってくる。

成功だ！！やはり思った通りだった。

切っ掛けはパクノダが読んだ記憶、炎に包まれた街に助けを呼ぶ声。

これは『衛宮士郎』が誕生した時の記憶だ。

そして、パクノダの念能力。

人の記憶を読む事の他に物の記憶を読むという能力があったはずだ。

つまり、この体は外見だけではなく本物の英霊エミヤの体だということだ。

こうなると余計にこの世界の俺の能力について知りたくなってくるが…今はおいておこう。

その後も衛宮士郎の使えたであろう魔術等は問題なく使用できた。

次はいよいよエミヤの本領、投影にかかるとする。

最初に投影する剣はやはりアレだろうと『干将・莫耶』をイメージした。

しかし…

出てこない？いくら回路を使用し、想像しても何も出てはこなかった。
やはりそうそううまくはいかないのか？

何故上手くいかないのかと考えていると側の棚に置かれたナイフが目に映った。

試しに駄目もとで投影してみるとコレがあっけなくうまくいった。

そこで気付く

俺は知らないのだ。例え体はあっても、培われた経験や解析された武器の知識が俺にはない。

投影できるはずもなかった。

完全に手詰まりだと思い始めた俺は……

そこでふと、劇中のあるシーンを思い出した。

士郎がアーチャーの腕から知識や経験を自分のものとしていたシーンだ。
アレと似たような事を俺もできれば、
きっと宝具の投影や戦闘もできるようになるのではないだろうか。
しかし、俺に耐え切れるだろうか。
本編の士郎のように例え成功してもよしんば廃人になる可能性もあるかもしれない。

だがこのハンター世界で自衛の力を得るにはこれに賭けるしかない。
もしかしたらもうどこかで死亡フラグがたっているかもしれないし
な！！

しかしこの方法にも希望があるといえばある。
それはこの体がエミヤ自身の体であるということだ。
生身の人間である士郎の時よりも負担は軽いはず……。

やるしかない。

侵食の代わりはこれでいけるのではと俺は早速腕を掴み、深呼吸した。

成功してくれよ。

—解析—

試みの成果をいうならば成功なのだろう。
頭の中、いや体中に膨大な情報が駆け巡る。
剣・槍・様々な武器や防具、来歴、経験、
そして磨耗し果て、エミヤ自身が忘れてしまったかもしれない思い出の数々ががががっががあがががががががががががががががががががががあがががががががあが

くるしいのかいたいのかも判断できない

粘土型に無理やり押し込められるような、ローラーで薄くのばされ

ていくような
自分というパネルが置き換えられていくような心地だった。
でもまだだ。まだよみきれていない。
おれはさらっに、たじュ、のかいせきをかけつづけル

いける―まだいケる！！

夢をみていた

色とりどりの花が咲く園、その中に見知った顔をみつけた。
あの人は俺が小学生の時亡くなったばあちゃんだ。そうか、ここは天国か
ん？ばあちゃんが小走りに近寄ってきた。孫を出迎えにきてくれたのかと笑いかける。

「あらま～、男前の外人さんだねえ。目元がりりしくてお爺さんそっくりだよ」

ばあちゃーん！！？
孫のこと気付いてくれないの？それに爺ちゃんは恵比寿顔の部類だったぞ。

「っ！！？」

飛び起きると窓の外にはぼんやり日が差し明け方近くなっていた。

自分のばあちゃんに逆ナンされるとかどんな欠けた夢だよ。

「はー、片づけをしなくてはな」

色んな意味で疲れた。

だがとにかく結果は上々だ。この体が昨夜とは違い、まるで元からそうであったようにしっくりとくる。

その証拠に今俺の目の前には塵一つないピカピカな部屋が広がっている。

「悪くない出来だ。むしろいい」

ここまでくると紅茶がほしくなってくるのはファンの性かアーチャーに感化されたのか。

でもこういう家事が自分でできるのって、楽しいものだったんだなあ。

この時浮かれた俺はすっかり忘れていた数値にしっかりとあらわされていた

彼自身の幸運ランクの低さを……

五話（後書き）

おまけ

ハンター道場第二回

「♪～」

「ムカムカムカ」

「あっれ～？どうしたのぉ、カルトくん」

「どうしたはこっちの台詞だよ。

どうしてまたこんなしょぼいコーナーにでなきゃいけないのさ。

それに今回はバッドエンドないんでしょ？僕等意味ないじゃない」

「お叱りがくる前にってことでしょ？それに死亡シーン紹介してばかりいたら不吉なイメージついて婚期逃しちゃうじゃない！！」

「……もうとっくに逃してるじゃない」

―ゴウッ―

「なにか、いったかし、ら？」

「ひっ！？（この闘気、イル兄以上？！）」

「コホン、ともかくイメージを上げるということで取りいだしたりますが、コレ！！」

ぴらん

「ブルマ？」

「そうよ！！着ければ何をしても許されるという効果のある礼装！これさえあればどんな残虐なことや悪魔的なことをしでかそうともたちまち人気者…ってあれ？カルトく～ん？いない。

……もうっ、しめる前に帰っちゃ駄目じゃない！」

このコーナーの人物は本編とは一切関係ありません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6375m/

偽狩人

2010年10月10日13時39分発行